第４章　まとめ

第１節　掛川市域の横穴群の動向

掛川市域に広範に展開する横穴群の動向を、河川の流域を主とするＡ～Ｍの13グループ（第54図参照）に分け、横穴式石室墳の分布や大谷横穴群との関連性に留意するとともに、最近の発掘調査の成果を踏まえて、簡単にまとめてみたい。

なお、遺跡名の番号および各横穴群の基数は『静岡県文化財地図・地名表Ⅱ』（昭和64年３月発行）に準じている。文章中で参考とした文献類についてはできるだけ註にしたが、発掘調査報告書等については、本報告書末の参考文献を参照していただきたい。

１．地区ごとの分布状況

Ａ－原野谷川上流域左岸（横穴式石室墳はあるが、横穴群が圧倒的に優勢な地区）

横穴式石室墳の45.長福寺古墳群〔3基〕１号墳は６世紀後半の築造比定がなされ、そのすぐ下流側に、48.長福寺脇下〔12基〕、52.北ノ口〔10基〕・54.古銭〔３支群14基〕・55.宮坂〔２支群22基〕・59.楠ヶ谷〔４支群135基〕の各横穴群が分布し、横穴群は比較的密度の高い分布傾向を示す。宮坂横穴群は、昭和57年に調査され17基を確認し、６世紀後半から７世紀前半代の築造とされる。よって、長福寺１号墳と宮坂横穴群の築造時期の先後関係は、長福寺１号墳がやや先行するか、ほぼ同時期とみなされる(註1)。楠ヶ谷横穴群は、総数135基を数える大規模な群構成を伴う横穴群である。丘陵尾根上には木棺直葬墳が確認され、同丘陵の下腹部に横穴群が占地する関係が確認できる。その横穴群の一角が昭和63年に調査され、最近刊行された『掛川市史』上巻で、当横穴群の群構造の解明が詳細になされているが、残念ながら大半は調査されることなく消滅してしまっている。古銭横穴群は、現在60基ほどが確認されていて、その数は100基を超えるとの推測もなされている。結局、群集墳の分布状況は、横穴式石室構造の長福寺１号墳がかろうじて横穴群の周縁に単独で位置するだけであって、それ以外はすべて横穴群で占められていることになる。しかもその占地状況は、楠ヶ谷横穴群にみられるように、支群を配した群構成の大規模横穴群の展開であることが確認できる。本地区が狭い墓域内において、小規模に散在する程度の木棺直葬墳から、まったく構造の異なる横穴式石室墳へと移行したことは、単なる内部変移だけで片付けることはできない。そこに何らかの政治的な強制力の介在があったことは、間違いないであろう。しかしその強制力は、横穴式石室墳の築造をわずか１～２基だけで終わらせてしまい、６世紀後半代には、直ちに大規模な横穴群だけの展開をみせ、それは、７世紀半ばから一部は８世紀にまで及んでいる。このことは、小地域における横穴群の母体となる集団の社会的状況が極めて政治的な影響を受けやすい不安定な状態から、安定型へと進展していったものであることに注目しなければならない。

ちなみに、右岸の和田丘原の大型古墳群の墓域空間がその後の群集墳の進出を忌避していることは、前代の首長に対する後代に生きる墓域内集団の同族結合が強かったことを物語っている。

Ｂ－原野谷川中流域左岸（木棺直葬墳から小規模な横穴群へと推移する地区）

横穴群の分布状況は、上流域の密集度に比べるとゆるくなっている。79.堂前横穴群〔３支群 31 基〕を中心として、78.甚佐ヶ谷横穴群〔３基〕の分布をみるだけであり、その内容は明らかでなかったが、平成２年に 153.土橋横穴群〔８基〕が調査され、周知の横穴墓１基のほかに、新たに７基が検出された。出土した須恵器は、遠考研編年で第Ⅲ期前葉から末葉に比定しうる古いもので、横穴群は６世紀中葉に築造されはじめ、６世紀後半に盛行期を迎えたとされる。この築造時期は、遠江では最も古いとさ

れる山麓山横穴墓や宇洞ヶ谷横穴墓に続く時期にあたる。各横穴墓の天井形態は、主体であるアーチ型にドーム型が混在している。天井形態が混在する状況は、大谷横穴群にも通じその関連性に注目したい。対岸では、和田岡丘陵の上流側に 94.久保山横穴〔２基〕を認めることができるだけである。この地区においては、木棺直葬墳と横穴群が似たような状況で展開することから、木棺直葬墳を築きあげた造墓集団が、新たな墓制として横穴群を積極的に採用していった姿を想定することができる。

Ｃ－原野谷川下流域（木棺直葬墳から小・中規模程度の横穴群へと推移する地区）

岡津原丘陵の南端には、194.岡津横穴群Ａ群〔８基〕・Ｂ群〔16基〕が存在したが、東名高速道路の建設によって消滅してしまった。その調査概報によると、Ａ群は７世紀前半で一部は８世紀前半まで続くとされ、Ｂ群は７世紀前半から中葉かその後半とされる。また、天井の形態は支群によって異なっている。すなわち、Ａ群はドーム型、Ｂ群は尖頭アーチ型である。一つの横穴群の中にあって小支群ごとに異なる形態が混在している状況は、本村横穴群や茶屋辻横穴群にも通じていて、大谷横穴群にも大きく関連してくる。また、Ｂ群６号墓は棺座に扁平な割石が敷かれていて、堤の内側には割石が横位に立て並べられてあった状況は、大谷横穴群Ａ－２号横穴墓と相似している。この地区は、同一丘陵内に木棺直葬墳と横穴群とが共存しているが、前者が６世紀前半代までに造墓を終えていることから、新たな墓制への転換が、Ｂ地区同様にスムーズに行われたものと思われる。岡津横穴群の北隣には195.ワゴ横穴群〔５基〕、同丘陵北部には170.椀貸横穴群〔３支群10基〕があり、狭い丘陵内での密集度は高いといえる。一方、右岸の各和丘陵の縁辺には141.山下横穴群〔３基〕があるだけである。

Ｄ－家代川流域（横穴式石室墳はあるが、横穴群が優勢な地区）

左岸丘陵南端部には、88.別所横穴群〔３基〕が存在する。当横穴群は、昭和57年に横穴墓１基が調査され、その築造時期は６世紀後葉もしくは６世紀末葉であり、７世紀前葉までの間に二度の追葬が想定されている。一方、この流域沿いの左右の丘陵上には、木棺直葬墳があまり群れをなすことなく散在しているが、具体的状況はまったく分かっていなかった。最近、別所横穴群の上流約0.6kmの対岸の丘陵上で480.天段古墳群〔２基〕の発掘調査が行われ、２基とも横穴式石室墳であることが確認された。７世紀中葉～後半の築造と考えられる。両者の間には造営時期にやや開きがあって、別所横穴群の方がやや先に築造されたものと思われるが、このように横穴群と横穴式石室墳とが近接距離の関係にある場合は、原野谷川上流域の長福寺古墳群１号墳と宮坂横穴群の関係と同じで、当該時期の墓制の違いを考える上で注目すべき存在であるが、総じてこの地区はＡ地区ほど横穴群があまり活発に展開することはなかった。右岸には宇洞の82. 十五ヶ谷横穴群〔２支群16基〕・75.味噌ヶ谷横穴群〔１基〕が存在する。

Ｅ－垂木川上流域（横穴式石室墳だけが分布）

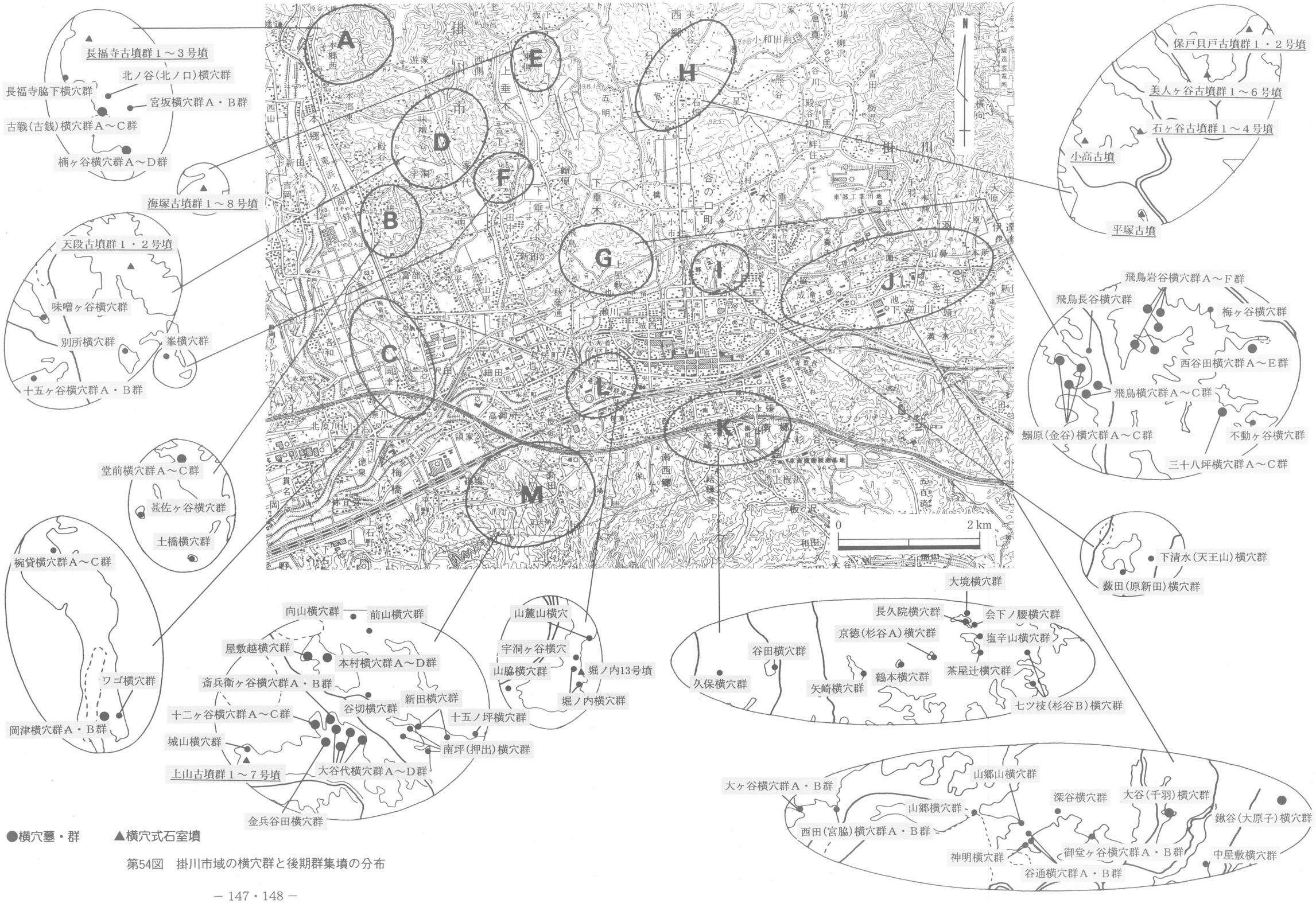
上流域には木棺直葬墳が点在するほかに、横穴式石室墳である71.海塚古墳群〔８基〕の分布をみるが、構造や時期等の詳細については不明である。下流域に飛鳥横穴群が大規模に展開してはいるが、この地区には横穴群の分布はない。このように、上流域に横穴式石室墳が散在し、下流域に横穴群が展開している状況は、Ｈ地区の倉真側上流域や菊川流域の状況と相通じている。

Ｆ－垂木川中流域右岸（中規模程度の横穴群だけが分布）

Ｅ地区と同様で、横穴群の分布は皆無であると思われていたが、右岸で偶然に峯横穴群が発見された。平成３年に調査が行われ、12基が検出された。総基数30基ほどの中規模の横穴群であることが確かめられたが、築造時期等については不明である。なお、Ｄ地区と併せて考えることができるが、峯横穴群の詳細が不明であるため、今は独立させて考える。

Ｇ－垂木川中流域左岸および倉真川下流域右岸（木棺直葬墳から大規模な横穴群へと展開する地区）

垂木川中流域左岸には遠江でも屈指の規模を誇る飛鳥横穴群が285.岩谷横穴群〔６支群54基〕を中心として、その周りに282.鰯原（金谷）横穴群〔３支群12基〕・283.長谷横穴群〔１基〕・284.飛鳥横穴群



●横穴墓・群　　▲横穴式石室墳

第54図　掛川市域の横穴群と後期群集墳の分布

〔３支群７基〕が位置している。最近の調査で全姿の概要が把握され、10群65基の横穴が存在し、あらためて密度の高さが再認識された。出土須恵器は、６世紀後半から７世紀半ばに比定されている。家代川上流域の別所横穴群とほぼ同時期であり、この時期が当地区の横穴群盛行期にあたっている。

一方、やせ尾根一つへだてた東南隣の倉真川下流域の右岸丘陵には、木棺直葬墳や、６世紀前半代の礫郭墳である291.次郎丸遺跡ＳＲＤＴ１遺構が分布している。バイパス関連調査では、木棺直葬墳の296.西谷田古墳群〔５基〕１号墳が調査され、古墳時代中期（５世紀）築造を想定している。占地に優れていることから、この地域の支配者を想定していることは興味深い。当地域には、301.三十八坪横穴群〔３支群40基〕・289.西谷田横穴群・〔５支群46基〕・287.梅ヶ谷横穴群〔６基〕が分布しているが、調査されておらずその実態はわかっていなかった。三十八坪横穴群は、昭和62年にＡ群の調査が行われ、４基の横穴墓が確認された。４基とも天井形態はドーム型であり、当横穴群の北隣に展開する他の横穴群のいずれもが尖頭アーチ型であったことから、当横穴群はドーム型横穴群の市内域の北限とされている。沖積平野からやや奥まったところという地理的条件に恵まれず、基数もやや少ない三十八坪横穴群Ａ群が、６世紀後半～末葉という中遠地域の横穴群の初現期に築造を想定されている点は、重要である。平成７年には、丘陵の東南端部の原横穴群で11基の調査が行われ、まったく存在が予想されていなかった横穴群で、破壊されたものを含めると20基ほどで峯横穴群同様に、中規模程度の横穴群であることが判明した。これらの横穴群は横穴墓の天井形態は別としても、築造時期等からやせ尾根一つ隔てた北西隣の飛鳥横穴群と一貫性を持った横穴群としてまとめることができるので、河川の流域が異なるものの同一内にグループ化した。

この地区の丘陵上にある木棺直葬墳の築造は、同一丘陵上の横穴群に先行する６世紀前半代におくことができ、掛川市域の他の地区と同様に、横穴式石室墳の成立を介在させずに、木棺直葬墳から横穴墓への転換が行われたものと思われる。この転換は、村落内部の家族集団による何らかの社会状況の変化に対応した墓制の転換の結果でもある。しかしそこには、遺体一体分の埋葬のために築かれる木棺直葬墳から、特定の家族集団のための埋葬施設としての横穴群へと被葬者集団のより下位化現象がみられることは留意しなければならない。

Ｈ－倉真川上流域（横穴式石室墳だけが分布）

この地区は、群集墳の展開する掛川市域にあっては最も奥まった地域であり、古墳時代後期の築造と思われる横穴式石室墳が比較的濃厚に分布する。239.美人ヶ谷古墳群〔６基〕１号墳・240.保戸貝戸古墳群〔２基〕２号墳・247.石ヶ谷古墳群〔４基〕・小高古墳〔単独墳〕・256.平塚古墳〔単独墳〕の５つである。平塚古墳は、箱式石棺を蔵していたことが知られているが、未報告であり内容は不明であった。近年刊行された『掛川市史』に簡単ではあるが、その概要が紹介されている(註2)。また、平成10年には現況確認調査がなされ、簡単な概報が公刊されている(註3)。そこでは円墳ではなく、方墳の可能性を示唆している。この地区には、横穴式石室墳が数こそ少ないが集中して分布する反面、横穴群は一つもない。追葬を前提とする点では両者は同じであっても、そこには相容れない墓制観念が厳として存在したのであろうか。あるいは、群集墳はどこに造墓してもよいということではなく、より上位の集団から墓域を賜与されたことから群形成がはじまったとする見解(註4)に立つならば、Ｈ地区で横穴式石室墳を経営し続けた下位の集団も含めて、これらの上・下集団は横穴群を展開していった上・下集団とはまったく系譜の異なる集団であったことを想定することができる。こうした状況は、先のＥ地区の垂木川上流域と同じである。また、本地区のやや下流沿いには、前方後円墳と考えられる全長110ｍの272.下山古墳が存在するが、本書第１章第２節で述べた通り、その詳細はわかっていない。支流初馬川左岸には281.大竹横穴群〔10基〕がある。この流域沿いには、木棺直葬墳や横穴式石室墳が全く存在しないことから、墓域から大きく離れて存在する大竹横穴群は注目すべきであろう。

Ｉ－倉真川下流域左岸（中期古墳・初期群集墳と小規模な横穴群が分布する）

当地区は、同時に逆川中流域右岸をも含むものであり、そこには逆川の沖積平野に向かって南北に展開する天王山丘陵がある。この丘陵は占地に非常に優れていて、倉真川・初馬川の合流地点でもあり、逆川の沖積平野の中心部分に位置するものである。『延喜式』記載の「横尾駅」はこの近辺に比定されている。この丘陵の南半には、古墳時代後期の小型前方後円墳と考えられる天王山５号墳を主墳とする315.天王山古墳群〔５基〕が位置し、その他６世紀中葉から後半代にかけて築造された木棺直葬墳で、一つの古墳群を構成している。このように、群内に中小規模の前方後円墳が群の盟主墳として混在し、しかも、それらが古墳群の形成初期に築かれているのは、中小首長が彼らの上に立つより上位の首長から族長としての任務と地位を承認されることが、群集墳形成の端緒になったことを示しているとされる(註5)。丘陵の北半には、小型前方後円墳である310.原新田古墳〔単独墳〕やいくつかの木棺直葬墳が連なっている。年代的には、横穴群よりも一時期古いとされる。天王山古墳群は、小型の前方後円墳をもっていることに加え、北側に続く円墳群と共に、大規模に展開する飛鳥横穴群と隣合わせに位置する円墳群として注目されている。こうした状況は、横穴式石室墳だけで構成されている倉真川上流域と併せて、この河川の流域を支配していた豪族層は、従来持っていた勢力を多少減じたとしてもなおかなりの勢力を維持していた、あるいは横穴墓の導入に対応しなかったと考えられている(註6)。しかしこうした見解については、次の２つの疑問点があげられる。第１に、この地区にあっても丘陵の東西の端部には、314.下清水（=天王山）横穴群〔１基〕と309.薮田（=原新田）横穴群〔５基〕が点在している。いずれも規模は小さいのではあるが、古墳群と同一丘陵上に点在する２つの横穴群の存在は無視することはできない。これらの横穴群は、対岸の飛鳥横穴群から続く三十八坪・西谷田・原横穴群などと近似的な様相をもつものと考えられる。第２に、天王山古墳群は別としても、倉真川上流域の古墳群は、横穴式石室墳であって前代からの系譜をひく古式の墓制ではない。各古墳の築造時期が、横穴群盛行期の直前で終わっていることと、その直後には、新しい墓制としての横穴式石室墳や横穴群を採用していることからして、やはりこの流域にも政治的変動は訪れたのである。この流域を支配していた豪族層の勢力の進退は別にしても、新しい墓制を採用せざるを得ない状況下におかれ、それを受け入れざるを得なかったものと思われる。やはり、同一集団による新たな墓制への転換と理解することができるが、両者を系統的に結びつける考古学的資料は現在までのところ検出されていない。

Ｊ－逆川中流域右岸（小・中規模の横穴群だけが散在的に分布）

バイパス関連調査で、木棺直葬墳の322.大平山古墳群〔４基〕１号墳は、古墳時代後期（６世紀中頃）の築造とされ、また古墳の占地に優れていることから、この地区での地位の高い者が被葬者として推測されている。また、横穴群は逆川流域沿いに東西に点在していて、大谷横穴群もこの中の一つに数えられる。丘陵ごとに東から354.鍬谷（大原子）〔11基〕・356.中屋敷〔１基〕・353.大谷（千羽）横穴群〔２支群30基〕が点在し、さらに同一丘陵上に350.御堂ヶ谷〔２支群８基〕・340.深谷〔１基〕・345.谷通〔２支群13基〕・341.山郷〔２基〕・346.神明〔６基〕・337.山郷山横穴群〔３基〕がある程度のまとまりを持って存在する。さらに西端には、327.西田（宮脇）〔２支群９基〕・329.大ヶ谷横穴群〔２支群５基〕が沖積平野に面して分布している。この内調査された横穴群は、わずか３ヶ所である。大谷横穴群と同一地区であることから、やや詳しくみてみたい。まず山郷横穴群は、１基だけが調査された。西向きの開口で、玄室床面の平面形は不整楕円形で、ゆるやかな袖部（両袖型）を有する。天井形態は不明である。遺物が出土しなかったことから、その築造時期を比定することは困難であるが、隣接する横穴墓から、６世紀後半と推定している。前庭部が急斜面に断面Ｖ字状に造りだされていることは、大谷横穴群と様相を異にする。谷通横穴群は周辺所在の横穴群と同様に、３段にわたり営まれている。このうち調査されたのは、１基だけである。前庭部は断面Ｖ字状である。玄室床面の平面形は隅丸方形の

両袖型で、断面アーチ型である。棺台は造り付けで、河原石を敷き詰めている。出土遺物からその築造は6世紀末で、7世紀終わりまでの追葬を想定している。御堂ヶ谷横穴群A群1号は、玄室床面が隅丸長方形で、ゆるやかな両袖部を有する。断面形は奥壁残存部分からドーム型を想定している。注目すべきは、玄室内に木棺礫郭土壙墓（長軸190cm、短軸130cm、深さ30cmを測る）が、墓壙南壁と玄門内側の間には長軸95cm、短軸50cmを測る土壙が造られている。追葬時の土壙として築造されたものと想定している。出土遺物から、6世紀中葉から追葬を重ね鎌倉時代中葉、13世紀中頃まで使われたものとする。本横穴群A－14号墓も、後世玄室内に土壙が掘られていることから、横穴墓再利用として共通する。A群2号は玄室は袖部がなく、側壁からゆるやかに羨道部に向かって細くなる杓子状で、断面形ドーム状。棺台上には、人頭大の河原石2個ずつを置いて木棺を安置する。築造時期については、出土遺物から7世紀後半を想定している。

この地区は、木棺直葬墳が散在するが、いずれも横穴群に先行して築造されている。しかし、あくまでも横穴墓が主体をなす墓域であり、横穴群と横穴式石室墳の併存も認められない。小規模で散在的な横穴群しか成立し得なかったこの流域の生産力は、著しく小さなものであったと思われる。このような横穴群の分布のあり方は、大規模に密集する大型群集墳に対して、散在する「等質的群集墳」ともいわれている(註7)。

なお、対岸の左岸丘陵上には13の古墳群数十基が散在するが、いずれも木棺直葬墳であり、古墳時代後期の早い頃のものと思われる。横穴群が1つも分布していないことが気になるが、この丘陵を一つ南に隔てた丘陵上には、菊川の一支流である西方川流域に築造された大規模な横穴群が分布している。中遠地域の一角を占める掛川市域の横穴群と菊川流域に代表される東遠地域の横穴群との間には、その分布状況からして、両地域の連続性を考える見解(註8)もあるが、その分布状況からすれば、両地域の周縁としての空白地帯としても考えることができる。

K－逆川中流域左岸（小・中規模の横穴群だけが散在的に分布）

木棺直葬墳がわずかに点在するだけであって、この地区の開発の遅れを物語っている。それに対して小規模ではあるが横穴群が、流域沿いに東西に間隔をおいて分布する状況からして、6世紀後半から7世紀初頭にかけて、外部勢力による地域開発が行われたものと思われる。なお、横穴式石室墳は確認されていない。東から、432.七ツ枝（杉谷B群）〔3基〕・425.大境〔5基〕・428.会下ノ腰〔7基〕・427.長久院〔9基〕・429.塩辛山〔11基〕・431.茶屋辻横穴群〔17基〕が小・中規模ではあるが、ある程度のまとまりをもって存在している。さらに、424.京徳（杉谷A群）〔19基〕・423.鶴本〔7基〕・422.矢崎横穴群〔8基〕が中ほどに点在している。さらに西側に移動すると、逆川下流域左岸の大規模横穴群地帯との空間を埋めるかのように、東から421.谷田〔5基〕・418.久保〔2基〕・413.寺ヶ谷横穴群〔12基〕がいずれも小規模ではあるが、点在している。現在のJR掛川駅の南に位置するこの地区は、駅からも近いことやいずれもが小・中規模であったために遺跡としての関心が薄く、横穴群の大半は調査されることもなくすでに消滅してしまっているか、先行き短い状況下にある。現在までに調査されてその概要がつかめるのは、2つの横穴群だけである。茶屋辻横穴群は、平成10年に調査され18基が検出されている。中でも、17基の横穴墓と背中合わせの1基単独のB－1号墓は玄室が2つある複室構造を呈している。これは掛川市域では初めての検出例である。出土遺物が6世紀半ばであることから、掛川市域にあってはかなり古い築造時期に属するもので、玄室構造の特異さと相まって非常に注目される。また、他の17基の横穴墓は、1基単独の場合と墓前域を共有しあう場合との2つにグループ化でき、天井形態も前者がドーム型、後者が尖頭アーチ型と明確に2分され、その築造時期も前者が6世紀で、後者は7世紀を想定している。その中で、17号墓の開口部には枠のような掘り込みがあり、板での封鎖の可能性を想定していることは、本横穴群のB－1号横穴墓に通じるものである。寺ヶ谷横穴群は、すでに大半

が消滅してしまっていて、１基だけがかろうじて平成10年に調査されている。築造時期は、７世紀末から奈良時代前半を想定している。この横穴墓も茶屋辻横穴群17号墓同様に、開口部付近に溝が掘り込まれていることから、やはり木の板での封鎖を想定している（このことについては、本書第４章第４節にて詳解している）。

この地区は、逆川中流域右岸と同様で、横穴墓が主体をなす墓制であり、横穴群と横穴式石室墳の併存は認められない。横穴群の分布状況やその規模からしても、この流域の生産力はやはり小さなものであったと思われる。

Ｌ－逆川下流域の左岸（東側の宇洞山近辺）（最初期の横穴墓と横穴式木芯粘土室墳とが併存）

この地区は従来、西隣の大谷代横穴群に代表される大規模横穴群の東端を占め、したがって横穴群が優勢な地区と認識されてきたのであるが、最近の調査によって新たな事実が判明したので、独立させて考えてみる。当地区は宇洞山と呼ばれ、現在市庁舎が建つ低丘陵である。407.山麓山横穴墓〔単独〕や408.宇洞ヶ谷横穴墓〔単独〕と、最近の市庁舎建設に伴って調査された410.堀ノ内古墳群〔７基〕・堀ノ内横穴群〔３基〕、あるいは山脇横穴群も分布する。この宇洞山丘陵は最近出版された『天保掛川宇洞山眺望図考』(註9)でも詳しく紹介されている通り、掛川市域にあっては逆川および原野谷川の形成した沖積平野をほぼ一望の元に見渡せる丘陵であって、この丘陵から相次いで首長墓クラスの古墳や横穴墓が検出されたことから、「王家の谷」と呼ばれている。これらの古墳や横穴墓を築造された順にまとめてみる。

まず、山麓山横穴墓である。宇洞山の北端部に位置し、しかも１基単独である。玄室平面は長方形の両袖型、断面アーチ型であり、金銅製馬具が検出されている。築造時期は６世紀前半が想定されることから、掛川市域にあってはもっとも古くに築造された横穴墓であり、和田岡丘陵の古墳時代中期の大型古墳群に引き続いて築かれていることから、両者の関係、特にその連続性が注目されている。封鎖施設として、河原石による封鎖ではなく、大型の板状岩を板戸状に使用している。昭和39年に調査された宇洞ヶ谷横穴墓は、県内最大規模であり、しかも１基単独で築造されている。玄室平面形は隅丸長方形で、天井形態はドーム型である。玄室内には造り付けの巨大な石棺があり、変形神獣鏡をはじめ単竜環頭式銀荘飾大刀などの大刀三振・金銅製馬具などの武器類を主体とする多量の副葬品を有する。こうした副葬品の構成・配置は、前方後円墳における竪穴式石室内の配置を継承したもので、本横穴墓は中期古墳的な様相を色濃く残しているとされる。封鎖施設としては、山麓山横穴墓同様に、羨道部に溝状の掘り込みがあったことから、やはり板状の石による閉塞を想定している。こうした仕様は、大谷横穴群Ｂ－１号墓にも通じていて興味深い。築造時期は、副葬品から６世紀中頃を想定している。この宇洞ヶ谷横穴墓もその副葬品の内容からして、和田岡丘陵の大型古墳群の後を直接引き継ぐにたる首長墓としての要素をもっている。なお、山麓山横穴墓や宇洞ヶ谷横穴墓の占地形態が、掛川市域の横穴群の多くが丘陵支谷の奥まった場所に築造されているのに対し、低丘陵の、しかも平野部近くに位置していることから、初期横穴墓の占地のあり方を特徴づけているとされる(註10)。しかし、宇洞山の地形を詳細に観察すると、２つの横穴墓とも丘陵の沖積平野に面した端に築造されているのではなく、宇洞山丘陵内の狭い谷地に向かって開口しているのであることは、留意しなければならない。やはりここにおいても、横穴墓の選地に、より上位集団からの強い規制があったことを確認することができるであろう。

続いて、平成３年の調査で、宇洞山丘陵の南半からは古墳時代初め頃の方形周溝墓２基、古墳時代後期の古墳５基、横穴墓３基などが発見された。中でも、宇洞ヶ谷横穴墓の南隣の堀ノ内古墳群13号墳は、横穴式木芯粘土室という特殊な埋葬施設を有する円墳であり、静岡県内では西部地方にその分布が限定され、掛川市域にあっては初めての検出例である。特殊施設を有すると共に、そこからは銅鏡をはじめとする大量の優たる出土品が検出されている。墳頂付近からの大量の祭祀遺物とあわせて、その築造時

期を6世紀後半から末葉に想定している。『掛川市史』上巻では、宇洞ヶ谷横穴墓からの副葬品に大量の武器類が多かったことから、本古墳の被葬者を宇洞ヶ谷横穴墓の被葬者たる武人に対して文人であった可能性を提示しており、また、県内の他の横穴式木芯粘土室をもつ古墳と比べた場合、群集することなく単独1基で営まれていること、規模が最大であること、副葬品が優れていることの3点から、宇洞ヶ谷横穴墓と同じ有力な首長墓として本古墳を位置付けられている(註11)。また、横穴墓も3基発掘調査されている。各横穴墓の規模や天井形態などの詳細は現在のところ不明であるが、金銅製馬具などが検出されている。

以上まとめてみると、本丘陵上には掛川市域でも最も古いとされる初期横穴墓の山麓山横穴墓や宇洞ヶ谷横穴墓のほかに、横穴式木芯粘土室を有する円墳といくつかの横穴墓とで構成される堀ノ内古墳群とが分布していた。国造クラスに匹敵するほどの勢力を誇った和田岡原の首長層が築いた大型古墳の築造停止が、5世紀中頃とされている。その後、和田岡古墳群の系譜は、丘陵南側に点在する権現山古墳や宇佐八幡神社古墳などに引き継がれていくが、その系譜は次第に不明確なものになってしまい、しばらくの空白期間を入れて、宇洞山丘陵の一回り規模を縮小した首長墓の系譜に引き継がれていくとの指摘がある。その空白期間に、和田岡丘陵と宇洞山丘陵のほぼ中間に位置する岡津原の前方後円墳や大型円墳を介在させることは可能であろう。これらの首長系譜については、国造の勢力圏との関連性、すなわち素賀国造の系譜と大きく連動するものと思われる。

本丘陵上の古墳の築造順序は首長層の世代ごとに対応するものであり、単独横穴墓・横穴式木芯粘土室墳、そして横穴群の順となる。高塚墳である横穴式石室が4世紀代からの伝統的墓制であるのに対し、横穴墓は後出的な墓制とされている。しかし、遠江地方では、横穴式石室の採用と横穴墓の導入とはほぼ同じ時期として図式化されている。狭い宇洞山丘陵に存在する相違する墓制の併存関係は、この図式化に矛盾することなく、あてはまることになる。しかし、本丘陵が首長墓クラスの横穴墓2基と特殊な横穴式木芯粘土室1基という異なる墓制で構成されているということは、そこに単一の墓制だけでは済まされない政治的動向を別に読み取る必要がある。このことについては、所帯を率いる家父長およびその所帯が2つあって、両者が別々の村落に居住しているにもかかわらず、同一の墓域に強制的に古墳を築造しなければならない何らかの力が加わっていたと考えることができる(註12)。一方では、次のように考えることもできる。横穴墓制を採用した首長層が自分の配下として系列化している有力農民層に同じ墓制を強制したことは、周辺に密集する大規模な横穴群の分布からも容易に推察することができる。ところが、次代を引き継いだ首長にとって、横穴墓は首長墓としてはもはや魅力のない墓制に一般化してしまっていた。そこで彼（もしくは次代の首長）が採用したのが、掛川市域にあってははじめての横穴式木芯粘土室墳であったのではあるまいか。その後の状況は、新たに横穴墓が数基築造されたとはいえ、群集墳の終焉からして追葬の時代に推移している。

M－逆川下流域の左岸（西側）（横穴式石室墳はあるが、圧倒的に大規模な横穴群が優位）

この地区は、古墳時代後期になっても木棺直葬墳や横穴式石室墳はあまり築かれない。木棺直葬墳では、本村横穴群と同一丘陵上の208.本村古墳〔3基〕が東名高速道路の建設にともなって調査され、6世紀初頭のころに築かれたとされる。また、横穴式石室墳はこの地区の西端に235.上山古墳群〔7基〕6号墳が1基あるだけである。いずれにしても、これより下流に展開する横穴式石室墳が主体となる袋井市域の古墳群のあり方とは大きく異なっている。遠江にあっても有数の圧倒的に密集しあうこの地区の横穴群の分布状況は、同地区内に点在する八切池・大代池・東照ヶ谷池・丸池といったため池（ため池が灌漑用につくられたのは江戸期）周辺の丘陵地帯に中・大規模の横穴群が分布するもので、すでに消滅してしまった横穴墓まで含めるとその総基数は150基を上回るとされている。八切池周辺には224.十五の坪〔2基〕・221.新田〔12基〕・220.南坪（押出）〔15基〕・215.谷切横穴群〔1基〕が、大代池周

辺に219.大谷代〔４支群59基〕・216.斎兵衛ヶ谷〔２支群32基〕・217.十二ヶ谷〔16基〕・218.金兵谷田横穴群〔３支群32基〕が、東照ヶ谷池周辺に、向山・前山・212.本村〔４支群17基〕・211.屋敷越横穴群〔14基〕が、丸池周辺には236.城山（丈山・上山）〔１基〕横穴群が分布する。これだけの横穴群が存在するにもかかわらず、調査された横穴墓の数はわずかである。

まず、宇洞山丘陵と大谷代横穴群との中間に位置する高御所丘陵の北側で、平成８年に向山横穴群が調査された。築造時期は６世紀前半代と想定され、初期横穴墓とされる山麓山横穴墓や宇洞ヶ谷横穴墓と併行するか、あるいはそれを上回って築造されたことになる。慎重を要する。各横穴墓の群構成、規模・天井形態等の詳細は分からない。報告書の刊行が待たれる。向山横穴群から100m程南に位置する前山横穴群は、平成９年の発掘調査で４基を検出している。簡単な概報しか公刊されていないが、羨道部に「ふたをするための木をはめる溝」を有する横穴墓が検出されていることは、興味深い。本村横穴群は、東名高速道路建設にともなって昭和41年に調査された。Ａ群８基、Ｂ群７基の横穴群で構成されていた。築造時期は、Ａ群は６世紀中頃から築造が開始され、山麓山・宇洞ヶ谷横穴墓に続くものと位置付けられている。また、天井形態はドーム型と尖頭アーチ型とが混在しており、Ａ群がドーム型、Ｂ群が尖頭アーチ型である。小支群ごとに違う天井形態が採用されていることは、岡津横穴群や茶屋辻横穴群に通ずるものである。単独横穴墓と墓前域を共有する横穴墓とに分けられるが、後者は群集を始める初期のスタイルであり、また、その違いはこれら横穴墓の被葬者の階層差を想定している。なお、注目すべきは、Ｂ群１号墳である。全長80cm弱のいわゆるミニ横穴墓であって、火葬骨を納めた可能性を想定している。大谷横穴群のミニ横穴墓との関連が注目されるであろう（このことについては、本書第４章第３節にて詳解している）。同一丘陵上には、時期的に横穴に先行する木棺直葬墳が分布しており、同族内での墓制変換を表すものと考えられている。

掛川市域を代表する大谷代横穴群は、その周辺の斎兵衛ヶ谷・十二ヶ谷・金兵谷田横穴群とは同一横穴群の大きな支群として考えてもよいほど近接しあっている。残念ながらその大半がすでに開墾されてしまっており、その全容はもはやわからない。それでも、全体の詳細分布と略側を含めた10基だけではあるが、昭和63年に調査されている。本横穴群は４支群に分かれる（Ａ群25基、Ｂ群19基、Ｃ群基数不明、Ｄ群15基）。特徴の一つに、玄室平面形が正方形や長方形であり、天井形態がアーチ型、尖頭アーチ型、ドーム型と多様なことである。築造時期については、調査したＤ群23号横穴墓の出土須恵器が６世紀後半であることから、全体としては、６世紀後半でも古い時期に築造が始められたことが判明している。７世紀前半の築造も多く、追葬を含めると群集墳終焉の８世紀にまで及ぶとされる。また、昭和62年に南坪横穴群が調査され、19基が確認された。中でも10号墓からは、火葬骨を納めた甕形土器が出土しており、８世紀前半の所産とされ、墓制転換の一端を明示するものといえよう。その他詳細については不明である。平成７年には、新田横穴群の一部が調査され、４基が確認された。４基とも天井形態は尖頭アーチ型である。築造時期は、７世紀半ばから後半代と想定される。注目すべきは、横穴群と近接した地点で、ほぼ同時期の竪穴住居跡が検出されたことである。この時期の集落の調査が遅れていることから、貴重な事例を加えることができた。城山横穴群は１基だけではあるが、新幹線建設に先立って昭和39年に調査されている。玄室平面形は逆台形の両袖型で、玄室内には造り付けの石棺を有する。６世紀後半の早い段階を築造時期として想定している。なお、同一丘陵内に横穴式石室墳をもった上山古墳群があることから、両者の併存関係が想定される。

総じて、この地区の横穴墓の築造時期は、７世紀前半を盛行期として位置付けることができる。Ｍ地区のさらに下流域で展開される地蔵ヶ谷横穴群を始めとする横穴群についても同様なことがいえるのであって、両者は密接に関連しあっている。

2.「ミヤケ」と横穴群

掛川市域すなわち逆川・原野谷川流域の古墳群の状況をみると、古墳時代中期頃、和田岡原や高御所の大型古墳群の展開が、継続することなく衰退してしまう。そして、古墳時代後期の前半には、木棺直葬墳からなる初期群集墳が比較的多くみられる。こうした群集墳成立の背景には、6世紀に大型古墳を造った大豪族の支配を支える古い共同体が分解して、家父長的な有力農民層が広範に現われ、家族（同族）ごとの墓を造るようになったことによって始められたとする見解(註 13)が広く受け入れられている。しかし、こうした木棺直葬墳の分布の在り方は、散在するものであって群集傾向を示していない。この状況に対して、同じ古墳時代後期の後半に、構造のまったく異なる横穴式石室墳や横穴群、あるいは横穴式木芯粘土室墳といった多様な形態の後期群集墳が登場し、とりわけ掛川市域での横穴式石室墳の数をはるかに圧倒する横穴群の分布およびその密集性は、遠江全域にあっては特有の状況にあることを確認できる。こうした横穴群の分布域の拡大およびその盛行は、平野吾郎氏の説く「ミヤケ」の成立・開発と大きくかかわっていることはよく知られている(註 14)。

逆川流域の沖積平野部の新たな開発と、それまで古墳の築かれることのなかったこの流域に首長墓クラスの山麓山横穴墓や宇洞ヶ谷横穴墓といった新しい墓制としての横穴墓が導入された背景として、平野氏は、大和王権による「ミヤケ」経営をあげている。大和王権の直轄領としてのミヤケの設置にあたっては、その管掌者として、畿内方面からの渡来系氏族・集団の移住があり、その移住と前後して和田岡原の首長層の打倒があったとされる。同地への大和王権の進出には、三河・遠江以東の東海道を支配していた物部氏の果たした役割も見過ごすことはできない。遠江に設置されたミヤケは安閑朝前後に、物部氏の勢力圏内に設置されたものであり、その運営については在地の物部氏一族の力が大きく寄与しているとされているのである(註 15)。また、ミヤケ設置にともなって進出してきた新たな集団によって、このとき系列化されたと思われる在地小豪族層や有力家父長層に、「ミヤケ」への参加を強制することと、従来からの先住者である彼らが新たな墓制としての横穴墓を採用することとは、密接に関連しあっている。「ミヤケ」による平野部の開発は、この在地小豪族層や有力家父長層の存在を無視してはなし得ることはできず、と同時に、掛川市域の何ヶ所にも展開する100基前後の大規模横穴群の築造も、彼らの力を借りる事なくして成就することはできないのである。ちなみに、平野氏は従来の墓制とは異なる横穴墓制を採用した集団は、在地の集団ではなく、すべてミヤケ設置に伴う外来系の集団によるものであるとされている。

ミヤケの設置の時期に関しては、新たな見解が提唱されている。通常、ミヤケの設置は『日本書紀』等の記事から6世紀後半代とされているが、それに対して、7世紀前半代に時期を遅らせる見解がある(註 16)。つまり、『日本書紀』の安閑朝にあらわれるミヤケ設置の記事は、推古天皇 15 年の記事等を中心とした書紀編者の造作であり、6世紀後半代のミヤケ設置は可能性が薄いとされる。そして、ミヤケの果たした役割が、横穴墓制成立期にあるのではなく、その反対に、開発の成功と生産力の増大を果たした横穴墓被葬者集団の存在を前提として、その上にたってミヤケが成立し、より一層の生産力の進展が図られたのであるとする考えである。傾聴すべき見解ではあるが、この見解に従うと、ミヤケ設置以前にすでに掛川市域では横穴墓がいくつか存在していることになる。それでは、横穴墓被葬者集団がなぜ、従来からの伝統的な墓制を放棄するにいたったのか、その理由を説明することが困難である。

ミヤケ設置の契機に関しては、ミヤケの設置と国造任命とが一体化したものであるとの見解がある(註 17)。大和王権が「乱」等をきっかけに介入することでミヤケが設置されていくのであって、この「乱」鎮圧を通して、圧伏された在地勢力の大和王権に対する従属度が深まり、その時点で国造に任命されたとの考えである。

和田岡原の大型古墳群と首長の系譜関係が密接な岡津原の古墳群は、5世紀末から6世紀前半には衰

退し、しばらくの空白期間をおいて、6世紀前半の山麓山横穴墓やほぼ同時期に築造されたとされる向山横穴群・土橋横穴群、あるいは茶屋辻横穴群内の一部の横穴墓が登場し始める。大和王権が自己の勢力をこの地に敷衍する手段としてミヤケの設置を行い、それに伴って移住してきた外来集団によって横穴墓制が採用されたのであれば、その設置時期はおのずと前記の空白期間前後におくことができよう。この空白期間に、掛川市域でどのような政治的変動があったかはわかる術もない。しかしそれは、首長層にとって、伝統的な大型古墳の築造を断念せざるを得ないほどの重要な変化なのである。一方、新たな墓制の担い手として、平野氏は、政治的変動後、新しく地域集団の中心となった外来移住者を想定しているが、大和王権の前に屈服し、強い統制下におかれた和田岡原の首長層の姿を考えることもできる。彼らはそれ以前の地方を支配する首長としての地位を大和王権に認められるとともに、あらためて国造の地位に就くことができた。また、大和王権は彼らの在地支配を利用することで、地方支配を強化していったものと思われる。ミヤケの設置に関しては、新たに国造に任命され、その地位の保全を図る必要上、あるいは大和王権への従属度を強めるためにも、彼らが自ら進んでミヤケを大和王権へ奉献したものと思われる(註 18)。そのためには、従来の原野谷川流域を中心とする開発領域以上の支配領域が必要であり、そこに逆川流域までを含んだ広域を制圧していこうとする和田岡原の首長層の新しい姿を想定することも可能である。伝統ある古墳をやめさせられ、強い規制のもと横穴墓（山麓山横穴墓や宇洞ヶ谷横穴墓）を採用せざるを得なかった彼らではあるが、前段階に引き続いて生き残ることに成功し、あるいは国造として大和王権に強く圧せられながらも、在地小豪族層や有力家父長層を大和王権の権力を背景に、あらためて支配することに成功し、従来から支配関係にある在地の彼らにも横穴墓制の採用を強く迫ったものと思われる。国造の地位を公認されたことは、地方を支配する首長にとって、それ以前よりも地域支配を強化することができたことを意味する。木棺直葬墳の分布状況と比べて、極めて強い規制の下で展開している横穴群の密集性がその一端を表出しているものと思われる。

3．掛川市域の横穴群の分布状況

横穴群の分布状況は、点状にわずかに分布する横穴式石室墳の分布とは一線を画することができ、一部地域で重なってはいるものの、そこに築造時期が多少ずれていることも確認できた。同一丘陵内での木棺直葬墳と横穴群が一緒に分布する場合も同じで、いずれにしても、前者から後者へと墓制の内部転換が急速になされている。最近、相次いで調査された向山横穴群・土橋横穴群あるいは茶屋辻横穴群内の一部の横穴墓が、6世紀前葉あるいは中頃という木棺直葬墳の盛行期にすでに築造を開始しているということは、墓制の内部転換の先駆けとして注目される。さて、新たな形態の墓制として横穴式石室墳を採るか、横穴墓を採るかという点については、それがそのまま新しく任命された国造の地方支配の勢力伸張と各地区の在地小豪族層や有力家父長層の国造に対する各自の対応の結果としての分布の相異として表れているように思われる。ところが、そこに直面する彼らの姿勢については、当該期における集落調査が遅れていること、また、彼らを含めた当時の社会構成の分析が十分になされていないことから、この問題の解明に大きな支障となっている。

次に、横穴群の分布状況についてである。大きく2通りに分けることができる。

先ずは、主要河川である原野谷川や逆川が開析した沖積平野の周縁丘陵部に分布する場合である。具体的には、楠ヶ谷横穴群を中心とする横穴群地帯、飛鳥横穴群を中心とする横穴群地帯、大谷代横穴群を中心とする横穴群地帯のように、分布の核となるような中心横穴群が存在し、大規模な群集傾向を示す場合である。そこには、新たに任命された国造の強力な支配の下、「ミヤケ」経営に積極的に参加する在地小豪族層や有力家父長層の姿を想定することができる。また、有力家父長層以下、広く農民層全体の共通の課題として、横穴墓築造が位置づけられて、階層分化の進行による社会不安をそれによって

逆に安定化させようという動きと捉える見解(註19)もある。

それとは対照的に、大谷横穴群の所属する逆川中流域のように小規模な横穴群が、比較的分散化傾向にある場合である。この場合、分散化傾向にあるとはいえ、横穴群が谷筋に沿ってほぼ等間隔に分布していることは注目される。こうした状況は、遠江の横穴式石室墳による群集墳の場合にも通ずることであり、両者の分布状態は非常に似通っている。その背景としては、ある一定の極めて狭い空間を墓域として設定せざるを得ない状況、例えば横穴群を経営する在地小豪族層や有力家父長層が弱体である場合などで、何らかの規制がより上位集団によって加えられていたことはもちろんのこと、地域の中での墓域の設定にも、何らかの意識が強く働いていたことが考えられる。また、彼らのミヤケ経営への参加姿勢に基づいた地域開発の進展度や横穴群被葬者集団の所属する集落規模に比例して、それが横穴群の大小・疎密となってあらわれているものと思われる。墓前域の共有状況、天井部のスタイル、棺座や袖部のタイプなど横穴墓一つ一つの多様性からすると、横穴墓の築造自体は築造集団の意思が強く反映されたものであることは間違いないが、この築造集団を支配するより上位の集団が、彼らに一定の墓域を与えることではじめて横穴墓の築造が可能となるのである。この状況を踏まえないと、横穴群の分散化傾向を解明することは困難となってくる。ちなみに、このように核となるような大規模な横穴群が存在しない場合は、各横穴群の開始時期にそれほど差が無く、ほぼ同時期にそれぞれが展開していったものと思われる。

横穴式石室墳と横穴群とが混在している場合については、掛川市域で該当する地区は3箇所である。第1に、原野谷川上流域左岸の長福寺1号墳と宮坂横穴群が両者の距離にして約0.6km、第2に、逆川下流域左岸の城山古墳群6号墳と城山横穴群は極めて至近距離に、そして第3に、家代川流域の天段古墳群1・2号墳と別所横穴群が約1.0kmである。また、横穴式石室墳が上流側に、横穴群が下流側に位置していることは3つとも共通する。遠江の場合、横穴式石室墳のほうが横穴群に先行して築造されることが多いが、天段古墳群1・2号墳と別所横穴群の場合は、横穴群が先行して築造されたので、その限りではない。このように両者が混在している流域は、横穴群分布の末端地域であり、両者の分布の接点ともいえる地域における現象とみられている。前2者の場合は、横穴式石室墳を凌駕して、横穴群が活発に展開していく。しかし、第3の場合は横穴群の展開は散発的である。同一地区内における墓制の相違が同一集団の造営にかかるものであるならば、それは極めて政治的な内部変移で処理することが可能である。しかし、そこに対峙する別々の造墓集団を想定するのであれば、数世代にわたって木棺直葬墳を築造しつづけてきたそれぞれの集団が、新しい墓制を導入するにあたって、何をもって2つの墓制を選択しているのか、といったその背景にある政治的、社会的なことについてはまったく不明である。

なお、倉真川上・中流域については、横穴群の導入に対応しなかった地域であり、そこには原野谷川流域を制していた首長層との対立関係があったのではないかと指摘する見解がある。それとは反対に、この地区自体が横穴群分布の圏外であり、点在する横穴式石室墳の密集度は弱いものであり、しかもいずれも小型であることから、この地域の首長層がもった政治的発言力の低下や生産力の低下を指摘する見解もある。この後者の見解の背景には、次のような考えがある。横穴式石室墳と横穴群とがほぼ同時期の6世紀半ばに登場する。そして木棺直葬墳を圧倒したにもかかわらず、7世紀代になると横穴群が爆発的に分布域を拡大し、横穴式石室墳を陵駕するにいたったのは、そこに被葬者間の生産力の相違があったからであるとの考えに基づいている(註20)。農業生産の個別経営化が進む中で成立した横穴式石室墳と横穴群とではあるが、横穴群を成立させた集団の社会構成は横穴式石室墳のそれに比べ、より発展的段階にあったとされるのである。しかし、現在の考古学的資料からは、両者を築造した被葬者層の生産力の相違まで読み取ることは困難である。いずれにしても、政治的動向をも十分に考慮した上で、新たな発掘調査例を待って、その状況をしっかりと構築する必要がある。

追記

掛川市域の横穴群をグループ化するにあたって、掛川市南東部の菊川町との境に位置する上小笠川流域の横穴群をあげなければならない。ここには、461.和田横穴群〔12 基〕や 474.桶田横穴群〔2 支群 11 基〕をはじめとしていくつかの小規模な横穴群が散在している。しかし、この地区の横穴墓に関しては考古学的調査がまったくなされていず、いたずらに推測を積み重ねる恐れがあることから、今回は考察の対象から除外した。

註

(1) 『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』 68 頁 1984 年 掛川市教育委員会

(2) 『掛川市史』上巻 192 頁 1997 年 掛川市

(3) 『掛川市「考古の日」出土文化財展』 1998 年 掛川市教育委員会

(4) 林部 均「群集墳と大和政権」『古代を考える 継体・欽明朝と仏教伝来』 1999 年 吉川弘文館

(5) 石部正志「群集墳論」『古墳時代の研究』第 12 巻 64 頁 1992 年 雄山閣

(6) 渡辺康弘「原野谷川流域の横穴群」『遠江の横穴群（静岡県内横穴群分布調査報告書Ⅰ）本文編』46 頁 1983 年 静岡県教育委員会

(7) 足立順司「群集墳に関する覚え書き－東遠江の例－」『静岡県考古学会シンポジューム 3 群集墳と横穴』 1981 年 静岡県考古学会

(8) 『平尾野添横穴群－平成 2 ・ 3 年度菊川内田住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第 37 集） 1992 年 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 同報告書第 1 章第 2 節「歴史的環境」による。

(9) 浅井保秀『天保掛川 宇洞山眺望図考』 1999 年 静岡新聞社

(10) 註(6)に同じ 52 頁

(11) 註(2)に同じ 198 頁

(12) 『静岡県史 通史編 1 －原始･古代－』237 頁 1994 年 静岡県

(13) 近藤義郎『佐良山古墳群の研究』1952 年 津山市

(14) 平野吾郎「原野谷川流域の古墳群について」『古代探叢－滝口宏先生古稀記念考古学論集』1980 年

(15) 註(12)に同じ 446 頁

(16) 『池ヶ谷横穴群発掘調査報告書』 1984 年 小笠町教育委員会 同報告書では、原島礼二「『日本書紀』のミヤケ設置記事」『古代文化』vol.26－1 を引用している。

(17) 館野和己「ミヤケと国造」『古代を考える 継体・欽明朝と仏教伝来』 1999 年 吉川弘文館

(18) この時期に設置されたのはミヤケだけでなく、名代・子代の設定も考えられる。内山眞龍の『遠江国風土記傳』や『掛川誌稿』では佐野郡垂木郷冨部について、「冨部」の地名の由来を物部氏の祖とされる宇摩志麻遅命の母の名代ではないかと想定している。一考を要するであろう。なお、『掛川誌稿』は最近全本刻された。斎田茂先・山本忠英共編『掛川誌稿－全翻刻－』（翻刻：中村育男 1997 年 静岡新聞社）が便利である。

(19) 利根川章彦「東国の群集墳」『古代を考える 東国と大和王権』平成 6 年 吉川弘文棺）

(20) 吉岡伸夫「群集墳と横穴群の構造」『遠江の横穴群（静岡県内横穴群分布調査報告書Ⅰ）本文編』 1983 年 静岡県教育委員会